日本放送協会報

2023年4月28日　号　外

主　要　目　次

・第98回放送記念日記念式典 …… 1

第98回放送記念日記念式典

第98回放送記念日記念式典を、3月17日（金）午前10時からNHKホールで開催しました。

開　　式

あ　い　さ　つ　会長　稲葉　延雄
経営委員会委員長　森下　俊三

来　賓　祝　辞　国光あやの　総務大臣政務官
浮島　智子　衆議院総務委員長
遠藤龍之介　日本民間放送連盟会長
河野　義博　参議院総務委員長（ご欠席のため司会代読）

第74回 日本放送協会放送文化賞贈呈式

職員表彰（会長賞）受賞者紹介

記　念　演　奏　ＮＨＫ交響楽団（弦楽合奏）
指揮：ウラディーミル・フェドセーエフ
曲目:弦楽セレナード　ハ長調　作品48から第1楽章（チャイコフスキー作曲）

閉　　式

編集・発行　**総務局**

あ　い　さ　つ

会長

稲　葉　延　雄

ＮＨＫ会長の稲葉でございます。

第98回放送記念日記念式典の開催にあたりまして、一言ごあいさつ申し上げます。

本日はご多忙にもかかわらず、総務大臣政務官・国光あやのさま、衆議院総務委員長・浮島智子さま、日本民間放送連盟会長・遠藤龍之介さまをはじめ、皆さまのご臨席を賜り、誠にありがとうございます。

また、本日は74回目の「放送文化賞」を、放送事業の発展や放送文化の向上に貢献をいただいた7名の方々にお贈りいたします。受賞される皆さまに心から御礼とお祝いを申し上げます。

放送記念日は、大正14年･1925年3月22日に、ＮＨＫの前身である社団法人東京放送局が、東京・芝浦の仮放送所から日本で初めてのラジオ放送を開始したことに由来して、昭和18年・1943年に制定されました。今回で98回目となります。

ＮＨＫがよって立つ放送法の第1条には、放送の目的として、放送の効用を国民にあまねく普及し、表現の自由を確保し、健全な民主主義の発達に資することがうたわれてございます。戦後の日本において、放送を通じて社会をより良いものにしていこうという、当時の立法関係者の熱い熱意を感ずるとともに、放送の普遍的な役割に改めて思いをはせるところでございます。

私は、こうした志の高い仕事を担っていけることを大変名誉に感じながら、日々職務に取り組んでいます。

放送法で掲げられている、こうした素晴らしい理念を実現していくため、ＮＨＫは、メディアを取り巻く環境が急激に変化する中にあっても、公平公正で、確かな情報を間断なくお届けして、皆さまの日々の判断のよりどころになりたいと考えております。また、質の高いエンターテインメントを提供することで、皆さまの生活がより豊かで文化的なものになりますよう、貢献してまいりたいと考えております。

今年は、日本のテレビ放送が開始して70年という節目の年を迎えます。日本のテレビ放送は、カラー化や衛星放送の開始、デジタル化、高精細化と、さまざまな技術革新を経ながら、ＮＨＫと民間放送の二元体制のもと、互いに切磋琢磨しつつ大きく成長を続け、国民的なメディアとして視聴者の皆さまとともに歩んでまいります。

そして、再来年の2025年には、日本のラジオ放送開始から100年を迎えます。日本の放送が放送法の高い志を保ちつつ、世紀を超えてさらなる発展を遂げますよう、全力で取り組んでまいりますので、今後ともＮＨＫへのご理解とご支援をよろしくお願い申し上げます。最後に、ご臨席の皆さまのご健勝を心より祈念し、私からのごあいさつとさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

経営委員会委員長

森　下　俊　三

第98回放送記念日記念式典の開催に当たりまして、ひと言ごあいさつを申し上げます。

本日はご多忙中にも関わらず、総務大臣政務官・国光あやのさま、衆議院総務委員長・浮島智子さま、日本民間放送連盟会長・遠藤龍之介さまのご出席を賜り、この記念式典を挙行できますことにつきまして厚く御礼を申し上げます。また、本日「放送文化賞」を受賞される７名の皆さまにもお祝いを申し上げます。

昭和28年、ＮＨＫと日本テレビが日本のテレビ放送をスタートさせて、ことしで70年になります。また、インターネットで地上波放送のテレビ番組を視聴できる「ＮＨＫプラス」を開始して、４月で３年になります。

インターネットの普及で、多種多様な情報が流れる一方で、裏付けのない情報や正しくない情報も拡散しています。その中で、正確な情報をお送りするＮＨＫの役割はますます大きくなると考えています。これからも質の高い正確で多彩な番組を「いつでも、どこでも」ご覧いただける体制を整え、幅広い年代の方々に視聴機会の拡大を図っていく必要があると思っています。

ことし１月、経営委員会は2023年度までの現経営計画の修正について議決し、10月から受信料を１割値下げするという過去最大の値下げを決めました。

「スリムで強靱な新しいＮＨＫ」を目指す構造改革をさらに強化し、経費削減を進め、衛星波の１波削減を実施する本計画は、これからの時代にふさわしい進化を遂げようというＮＨＫの強い決意であり、放送やサービスの質を低下させることなく、これらを着実に実施していかなければならないと考えています。

ＮＨＫグループ全役職員は、「公共メディア」に携わる人間として高い倫理観を持ち、重い社会的責任を負っていることを常に意識して、それぞれの業務に取り組んでいただきたいと思います。

私ども経営委員会も、与えられた使命と責任を深く自覚し、職責をしっかりと果たしてまいります。

本日、お越しいただいたご来賓の皆さまをはじめ、ＮＨＫを支えてくださっている各界の皆さまにも、引き続きご指導・ご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

最後になりましたが、皆さまのご活躍とご発展を祈念して、簡単ではございますが、私からのあいさつとさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

総務大臣政務官

国　光　あやの

本日は稲葉会長、森下委員長のもと、盛大に第98回放送記念日記念式典が挙行されますこと、心からお慶び申し上げます。また、テレビ放送も今年で70周年という節目の年に、この場に立てますことを本当にうれしく思います。

そして、栄えある「日本放送協会 放送文化賞」を受賞される７名の皆さま方、本当におめでとうございます。

我が国の放送は、公共放送と民間放送の二元体制のもとで両者が互いに切磋琢磨し、多様な放送番組を通じて豊かな文化を創造し、さらに国民生活の向上に寄与してまいりました。

改めて、関係の皆様のこれまでのご尽力に、深い感謝と心からの敬意を表します。

最近の動向といたしまして、近年、情報空間が放送以外にも広がっております。

特に、若者を中心に「テレビ離れ」が加速するなど、放送を取り巻く環境は大きく変化をしており、インターネット空間では、フィルターバブルやフェイクニュースのような社会問題も顕在化しております。

こうした中であるからこそ、放送事業者が信頼性の高い情報発信を行うことや、質の高い情報を多くの方に届け、多様な価値観についての相互理解を促進することは、これまで以上に大きな価値を持つことでございます。

テレビ放送70周年を迎えまして、ＮＨＫの今後のさらなる取り組みに強く期待をしております。

例えば、昨今の災害情報の迅速かつ確実な提供、また、視聴覚に障害のある方やご高齢の方を含む全ての視聴者にとって、必要な情報を得る機会が確保されることの重要性がますます高まってきているなど、きめ細やかな情報提供に一層取り組まれていくことを期待しております。

さらに国際情勢がめまぐるしく変化しており、偽情報や誤情報が問題となる中、国際放送につきましても、一層の充実・強化を図っていただきたいと思います。

これからも、豊富な取材力を生かされ、優れた魅力あるコンテンツを発信し、放送文化の発展にますます寄与していただけることを強く期待を申し上げております。

最後に、皆さまのご健勝と、我が国のさらなる放送の発展を祈念いたしまして、私からのお祝いの言葉とさせていただきます。本日はおめでとうございます。

衆議院総務委員長

浮　島　智　子

第98回放送記念日を迎えるに当たり、衆議院総務委員会を代表いたしまして一言お祝いを申し上げさせていただきたいと思います。はじめに、これまで、ＮＨＫの発展と放送文化の向上にご尽力してこられた皆さま方に対し、深く敬意を表させていただきますとともに、本日、栄えある「日本放送協会放送文化賞」を受賞される方々、および職員表彰を受けられる方々に、心よりお慶びを申し上げさせていただきます。本当におめでとうございます。

新型コロナウイルス感染症による影響や、ロシアによるウクライナ侵攻などの国際状況を踏まえまして、国民、そして視聴者の生命と財産を守る的確な情報が、ＮＨＫから視聴者一人ひとりに、テレビそしてラジオ、インターネットを通じて届けてくださっているところでございます。正確で迅速な報道が、これまで以上に重要になる中、緊急報道を可能とする技術面での支えが不可欠であります。これまで、放送技術の研究開発に取り組んでこられた方々のひたむきなご努力に心より敬意を表させていただきたいと思います。

ＮＨＫは、本日、「日本放送協会放送文化賞」を受賞される方々をはじめ、多くの方々に支えられながら、報道番組のみならず、幅広い分野において放送文化の発展に寄与してこられました。大河ドラマや朝の連続テレビ小説、また、長年にわたりお茶の間で多くの方に親しまれています幅広い層から長年にわたり支持されている料理番組、また、教養・教育番組、さらには、人々の心を癒やす優れた音楽や美術、そして伝統芸能などを紹介する伝統文化・芸術の番組が数多く制作されております。

近年、大規模な災害が頻発し、災害報道の重要性が高まってまいりました。ＮＨＫは、地域に根ざしたこのような情報をいち早く伝えるとともに、被災者の支援、そして防災・減災に役立つ番組にも力を入れてくださっているところでございます。今後も、こうした取り組みを続けていただきたいと願っております。また、昨年の放送法改正を踏まえまして、民間放送事業者とより一層の連携強化が図られますことを心から願っております。

令和5年度には、地上契約と衛星契約の受信料の1割値下げ、また、学生さんへの受信料の免除拡大など、視聴者への還元が行われる一方、ＢＳチャンネルの整理の予定がなされていると聞いております。ＮＨＫにおかれましては、視聴者からの受信料に支えられた公共放送であることを十分に自覚をし、そしてスリムで強靭な組織となるとともに、社会的使命を果たしていただきたいと思っております。

結びに、ＮＨＫが我が国の放送文化の向上に貢献し、ますます発展されることを願うとともに、本日、ご出席の皆さま方のご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げ、私のあいさつとさせていただきます。本日は大変におめでとうございます。

一般社団法人 日本民間放送連盟会長

遠　藤　龍之介

日本民間放送連盟の遠藤でございます。第98回放送記念日記念式典にお招きいただきまして、誠にありがとうございます。まずはじめに、日本放送協会放送文化賞を受賞される皆さま、そして表彰を受けられる職員の皆さまに、心よりお祝いを申し上げます。誠におめでとうございます。

テレビ放送は、戦後の自由な雰囲気の中、平和と民主主義への願いを胸に、当時すでに娯楽の中心にあったラジオを追いかけながら、歩みを始めました。駅や公園に置かれた街頭テレビの前に多くの人が集まり、プロレスリングやボクシングに熱狂した草創期、また、三種の神器の１つと称され、モノクロからカラーへと進化を遂げながら、お茶の間に、感動や笑い、社会や世界の出来事を届けてきた昭和、そして平成の時代、テレビは常に人々の生活の中で時代を紡いできました。そして、それはテレビ放送が開始されてから70年となる今も変わることはございません。

令和の時代の今、放送はテレビ、ラジオともにインターネットがもたらした大きな自由化の波にさらされています。コンペティターが増えたことは事実ですが、私たち放送の社会的役割や存在感は失われたわけではございません。正確で信頼してもらえる情報や、安心して楽しんでもらえる娯楽を、一斉かつ平等にくまなく届けること、また、そのことを通じて、われわれ放送事業者は社会がさまざまな感情を分かち合いながら、より良い未来をつくっていくことに今も貢献し続けています。

草創期に、先人たちが描いた理想を守り、厳しいメディア環境に適応し、放送が生き残っていくためには、二元体制を堅持して、ＮＨＫと民放が力を合わせる必要がございます。特に、膨大な情報の流れの中にある若い人々に、放送の価値を伝え続けることは肝要だと考えております。私も現代を生きる放送人の一人として、稲葉会長とともに、人々にテレビの前に集まってもらい、ラジオも楽しんでもらう努力を続けていきたいと思います。

今、桜の香りや彩りが街にあふれる中、行き交う人々の楽しいおしゃべりを耳にし、笑顔を目にする機会も戻ってまいりました。私たちの放送活動を通じて、希望に満ちた明るい社会の創造に取り組んでいければと考えております。

最後に、ＮＨＫのますますのご発展を祈念し、私のあいさつに代えさせていただきます。本日はおめでとうございます。

参議院総務委員長

河　野　義　博

（ご欠席のため司会代読）

第98回放送記念日を迎えるに当たり、参議院総務委員会を代表して、一言ごあいさつを申し上げます。はじめに、放送文化の向上や放送事業の発展へのご貢献、番組制作や技術開発等へのご尽力により、本日、放送文化賞および職員表彰を受けられる皆さまに対し、心からお祝いを申し上げます。

本年は、日本でテレビ放送が始まって70年となる節目の年です。ＮＨＫの皆さまにおかれましては、豊かで良い番組をあまねく日本全国に提供するという社会的使命を果たし、国民の期待に応えてこられました。また、各地域からの情報発信、先端的な放送技術の開発など、多方面において成果を挙げられておられます。テレビの黎明期から現在に至るまで、長年にわたるご貢献に改めて感謝申し上げます。

さて、近年、インターネットを中心に、不確かで曖昧な情報があふれる中、正確な情報を公平・公正に伝える公共放送としてのＮＨＫに求められる役割は、大変重要であると認識しております。これからも国民・視聴者の暮らしの安全を支える「信頼できる情報」の発信の強化に一層取り組まれることを期待しております。

言うまでもなく、ＮＨＫの経営は、視聴者の皆さまからの受信料によって支えられています。ＮＨＫにおかれましては、「訪問によらない営業活動」への移行による営業経費の削減など、経営計画に掲げるスリムで強靭な「新しいＮＨＫ」を目指す構造改革を積極的に進めておられると承知しております。引き続き、ガバナンスの強化、効率的な経営等を進めていただくとともに、新しい体制の下、公共放送の役割と責任を改めて自覚し、防災・減災報道の充実・強化、ユニバーサル放送の拡充など、視聴者に寄り添った取り組みをより一層推進されることを切に願っております。

今国会においては、ＮＨＫ予算や放送法改正案の審議が予定されておりますが、参議院総務委員会といたしましても、ＮＨＫを巡る諸課題の解決に資するよう尽力してまいります。

結びに、ＮＨＫが信頼される公共放送として、国民・視聴者の負託に応えていくことを、心より祈念いたしまして、私のごあいさつとさせていただきます。

第74回日本放送協会放送文化賞受賞者

栗原（くりはら）　はるみ　氏　《料理研究家》

『きょうの料理』の講師として、30年以上にわたり出演。伝統的な和食や西洋料理を身近な材料で、より作りやすくおしゃれに仕上げるレシピで幅広い層から支持を集め、番組を支えてきました。また、英語力を駆使して、ＮＨＫワールド『Your Japanese Kitchen』で日本の家庭料理を世界に発信しているほか、『プロフェッショナル・仕事の流儀』、『公開復興サポート』、『旅のチカラ』、『あさイチ』など多彩な番組に出演し、放送文化の発展に幅広く貢献しています。

津久井（つくい）　教生（きょうせい）　氏　《声優・俳優》

ＮＨＫＥテレ『ニャンちゅう』シリーズの声を30年にわたって担当。1992年に始まった『母と子のテレビタイム』から、現在放送中の『ニャンちゅう！宇宙！放送チュー！』まで、3世代にわたる視聴者の皆様に愛され続けてきました。筋萎縮性側索硬化症（ＡＬＳ）発症後も出演を継続し、2022年9月末の交代までの数か月はリモートで出演を続け、声優交代後は監修者として番組をバックアップするなど、番組を支え続けています。

寺西（てらにし）　信一（のぶかず）　氏

《静岡大学電子工学研究所特任教授》

いわゆる“電子の目”としてレンズに入った光を電気信号に変換するイメージセンサーの研究開発に長年取り組み、埋め込みフォトダイオード技術という新たな構造の発明で、飛躍的な画質の向上と高感度化を実現。放送用カメラの小型・高性能化に寄与し、番組の制作スタイルに大きな変革をもたらすとともに、迅速かつ明瞭な緊急報道を可能にしました。また、テレビ放送の高精細化にも寄与するなど、放送技術の発展に貢献しています。

本條（ほんじょう）　秀太郎（ひでたろう）　氏

《三味線演奏家・作曲家》

民謡や端唄など三味線演奏の第一人者として、長きにわたり多くの伝統芸能番組に出演。優れた技量で三味線の魅力、伝統音楽の粋を発信し続けてきました。また、数々の大河ドラマや連続テレビ小説などのドラマをはじめ、さまざまな番組で音楽監修や演奏指導を行うなど、豊富な知識を惜しみなく制作現場に提供し、番組の高品質化に寄与しており、放送文化の発展に大きく貢献しています。

三谷（みたに）　幸喜（こうき）　氏　《脚本家・演出家》

大河ドラマ『新選組！』、『真田丸』に続いて『鎌倉殿の13人』で3作目の大河ドラマの脚本を手掛け、いずれも大河ドラマの新たな一面を切り開きました。また、人形劇『新・三銃士』や『シャーロック　ホームズ』の脚本や、紅白歌合戦の審査員も3度務めたほか、民放でも視聴者の心に残る人気ドラマの数々を執筆。放送文化の発展に貢献し続け、多くの視聴者の支持を得ています。

吉竹（よしたけ）　顕彰（あきら）　氏

《気象予報士・気象キャスター》

30年以上にわたり福岡局の夕方の定時番組や災害時の全国放送の緊急ニュースで気象解説を担当。2017年の九州北部豪雨では、予想と大きく異なるレーダーの雨雲を見て線状降水帯の危険性を察知し、自らの判断で福岡局に駆けつけました。放送で、「きわめて危険な状況です。命を守る行動をしてください。避難をしてください。」と伝え、予報士による命を守る呼びかけの先駆けになるなど、全国の気象予報士の模範になっています。

吉行（よしゆき）　和子（かずこ）　氏　《俳優》

連続テレビ小説『あぐり』、『つばさ』、『ごちそうさん』、大河ドラマ『風と雲と虹と』、『徳川家康』、土曜ドラマ『スニッファー嗅覚捜査官』、最近では夜ドラ『つまらない住宅地のすべての家』などに出演し、大きな存在感を発揮しています。長いキャリアのなかでは、『おかあさんといっしょ』の“おはなしこんにちは”のコーナーでの活躍や、民放の話題作でも活躍し、幅広いジャンルで放送文化の振興に貢献し続けています。

放送文化賞受賞者のことば

栗原（くりはら）　はるみ　氏
（料理研究家）

このたびは素晴らしい賞をいただいて、本当にうれしく思っております。私は、結婚する前も結婚した後も、働いたことが全くありませんでした。はじめは、専業主婦として一生懸命やっていましたが、しばらくたった頃、家事だけをしている私が気になっていた夫から「僕を待たないでくれ、もっと自分のやりたいことを見つけたら」と。その一言があまりにも突然で、とても戸惑ったことは今でもはっきり覚えています。なにか自分にできることはないのか考え続けているうちに、自分には好きな料理しかないなと思うようになりました。

その後、栗原玲児の妻としてテレビの料理番組に出演したことをきっかけに、その番組の裏方として初めて仕事をすることになりました。それから、私の人生が大きく変わり始めました。しばらくして突然、いよいよ『きょうの料理』に出演することになって、そのときの本当にうれしかった気持ちは、決して忘れることはないと思います。

それから、仕事が順調に増えて、私のパーソナルマガジンを刊行することになりました。25年間やり続けた最後の100号が終わったら、玲児さんと2人で楽しい時間を過ごす約束をしていたのに、残念ながら25年の100号の途中で亡くなってしまいました。

今、人生で初めての一人暮らしの私は、寂しさと悲しみと言葉では言い表せないほどの孤独感を味わっています。寂しい道と元気にならなければいけない道の狭間の中で、私は絶えず迷いながら毎日を過ごしています。それでも、前に進まなければ、きっと残された人生に悔いが出てしまう。玲児さんが、泣いている時間はないよと。今、私は自分の新しい人生のために、またパーソナルマガジンを始めることになりました。

今の仕事は、自分の暮らしを本で伝えること。もう一つは、福島の人たちと今まで以上に仲良くさせていただきたいということです。4月から新しく始まる、ＮＨＫ福島放送局の夕方の番組で、福島のおいしいものや皆さんの暮らしをご紹介します。

料理作りは楽しいよと全ての人に伝えたい。自分がおいしいと思う料理の味を、正確に数字で出すことに、もっともっとこだわっていきたい。人の家に招かれる人より招く人になれば、人生が大きく変わることを知ってほしい。私は残りの人生を悔いのないように走り続けていきたいと思っております。ありがとうございました。

津久井　教　生　氏
（声優・俳優）

このたびは大変名誉ある賞をいただき、心から感謝しております。振り返れば、私は21歳の時から、ＮＨＫの「学校放送番組」「子ども幼児番組」に出演させていただきました。

特に『ともだちいっぱい』シリーズの『うたってあそぼ』ではキツネの「ヒョロリ君」という役で7年間も歌わせていただき、「キャラクター」として歌うという礎と、「譜面を読む力」を育てていただきました。

そして現在も放送が続いている『ニャンちゅう』シリーズでは、長年、ニャンちゅうを演じ続けてきたことで、ニャンちゅうが本当に実在している感覚をいただきました。自分一人が声を発しているのではなく、ニャンちゅうと一緒になってお芝居をしている感覚を味わえたのは、役者冥利に尽きます。放送文化はかかわってきた方たちと共に、常に発展し進化しているのだと思います。その進化の真っ只中に現場に携われたことは、素晴らしい経験でした。それと同時に、進化しながらも後世に残していきたい文化があることも事実です。

この受賞の喜びを、本来であれば会場でお伝えしたかったのですが、現在、難病である「ＡＬＳ（筋萎縮性側索硬化症）」に罹患していて、昨年12月に「気管切開の手術」を受けて声を失いました。まだ体調が落ち着かないので、そちらにうかがえずに残念に思っています。

しかしながら事前に収録しておいた「自分の声」で、挨拶文を読ませていただいています。この分野の進化も素晴らしいと思います。

私にとって、今回の受賞は大変大きな励みとなりました。心から感謝申し上げます。今回は本当に、ありがとうございました。

寺西信一（てらにしのぶかず）氏
（静岡大学電子工学研究所特任教授）

日本でテレビ放送が始まったのが、昭和28年、私の生まれた年です。70周年の今年、放送文化賞を受賞でき、誇らしく、うれしいです。多くの方々とのチームプレーで成し遂げたものであり、皆さまのおかげであり、感謝の気持ちでいっぱいです。

イメージセンサーは電子の目としてレンズに入ってきた光を電気信号に変換する半導体デバイスです。スマホのカメラやビデオカメラ、あらゆるカメラの中に装着されており、私たちの身の回りで多数活躍しています。

イメージセンサーではいかに強い電気信号を作り出し、邪魔となるノイズをいかに小さくするかが重要です。私たちが発明した埋め込みフォトダイオード技術は、ノイズを何桁も小さくすることに成功し、画質を向上させました。

1990年頃まで放送現場では真空管の一種である撮像管を用いたカメラが主流でした。電源を入れてもすぐには撮影が開始できない、大きくて重いなど欠点がありました。埋め込みフォトダイオード技術によって、撮像管はイメージセンサーに置き換えられました。イメージセンサーを用いたカメラは、電源を入れるとすぐに撮影することができ、小さくて軽いです。撮影スタイルに変化が生じ、屋外でもスタジオ内でも、その機動性を生かした画面構成がなされるようになりました。また、イメージセンサーは焼き付けがありませんので、太陽を直接撮影することができます。夏の高校野球中継の最初に太陽を撮影して、アナウンサーが、「きょうも暑い一日になりそうです」と言っていたのを思い出します。

その後も、イメージセンサーは画素を小さくするという進化を続けます。イメージセンサーには多数の画素が並んでいて、画素数が多いほど解像度が高くなります。放送では、ハイビジョン、４Ｋ、８Ｋと発展していきます。また、フィルムカメラはデジカメに置き換えられました。

画素サイズが小さくなると、カメラも小さくすることができます。スマホにカメラが搭載されるようになりますと、世界中の人々が、あらゆる写真、あらゆる映像を撮るようになりました。写真が好きなのは日本人だけではなかったようです。誰でも、どこでも、いつでも撮影できます。

（※客席にスマホのカメラを向けて撮影※）ここはちょっと笑顔をお願いします。

家庭内のほのぼのとした映像、街角のちょっと気になる風景、そして大スクープの映像が放送局に送られ、番組を構成しています。ソーシャルネットワークの発展と相まって、新しい映像文化の到来といえます。

次の進歩に向かって、イメージセンサーという面から寄与していきたいと思います。

ありがとうございます。

本條秀太郎　氏
（三味線演奏家・作曲家）

このたびは、日本放送協会放送文化賞を賜り、深く感謝申し上げます。

思い起こしますと、まだ内幸町にあった頃のＮＨＫに、師匠に連れられて三味線の録音に行ったことを思い出します。近くにおいしいラーメン屋さんがあって、懐かしい場所でした。そのあとすぐに、こちらの神南に、ＮＨＫがこんな立派な建物になって、素晴らしいところに移ってまいりました。

私の演奏会では、昭和の時代からだんだん昔のものに移っていくという、古代までの日本の音楽。そういうものを求めて、音楽を作ってまいりました。そしてその中で、江戸時代の音楽というのが一番、ドラマなどにたくさん使われるものですので、その頃の小さな、本当に小石のような曲を拾い集めて、あるものはそのまま使い、ないものはその断片をつなぎ合わせて作曲したり、そういうことをさせていただいて、作曲するということも、だんだん身に付いてきたんでしょうか、そんなことでございました。

そして、三味線が16世紀の頃に入ってまいりまして、その頃に三味線を初めて手にした日本人が驚きと期待と、どんな曲を作れるんだろう、どんなものができるんだろうということで三味線に携わってきたんだと思うんですね。そういう人たちが自由に、誰も、これはどうやって弾くんですよという、そういうものがなかったものですから、みんな自由に、こうじゃないかな、ああじゃないかなということで、いろんな三味線の音楽をこさえてきたようです。

そういうときの人たちの「初心（うぶ）」な心というんですかね、子どものように、三味線をどうしようか、こうしようかと思うそういう気持ちを、現代の三味線にも置き換えて考えたら、もっといろんな広がりができるんじゃないかということを思い、ずっと今までやってまいりました。

そういう思いで、俚奏楽という三味線音楽を創作したんですが、ドラマ『但馬屋のお夏』の中で曲を作らせていただいて、そのときは古い三味線が初めて日本に入ってきた頃の形の楽器を使って演奏いたしました。それから、『雪』というような作品もありました。そしてなんといっても大河ドラマですね、それから金曜時代劇という、そういう番組に携わらせていただいたことが、とても、自分の血となり肉となり、今の音楽、本條秀太郎の音楽というものを作り上げてくれたのだと思って感謝しております。

一番最初に大河の番組にさせていただいたのは、『竜馬がゆく』という作品でした。ここは偶然に、そのときにスタッフにだまされたというのか、唄も唄ってしまったという、ましてや、出演もしてしまったという、そういう思い出があります。『竜馬がゆく』、そして『元禄繚乱』、そして最後に、また、『龍馬伝』という、龍馬にとても関わりがあるなと。

この龍馬に関わりがあったというのは、明清学という江戸時代に流行ったものなんですけど、中国の音楽をサンプルにした日本で作られた音楽で、日本で作られた楽器で月琴という楽器を使う作品があるんですけど。それを、僕は若い頃に、長崎にうかがって勉強させてもらったことがあったので、それを龍馬のおりょうさんって方が、月琴の曲をとても愛してたんだそうで。たまたま、『竜馬がゆく』もそうですし、『龍馬伝』もそうですし、その月琴の曲を使ったりということをさせていただきました。

そして、なんといっても民謡の番組というのが数多くあるんですけど。初期の頃は、もう本当に

思い出すんですけど、ここのホールでよくさせていただいた『民謡をあなたに』という番組がありました。そこでは、三味線の作曲ということを手付という言葉で使っているんですけども、三味線の付いてなかった唄を引っ張り出してきて、そしてそれに三味線の手を付けたりして、編曲をさせていただいて、民謡の方にそれを覚えていただく、そして、この大きなホールで発表させていただいた。もう本当に民謡の未来を夢見ながら、期待と喜びの中、無我夢中で民謡の番組をさせていただきました。今でも、もちろん続いておりますけども、まだまだこれからも、民謡が発展の途上だと思うので、なんとかいい音楽にできたらいいなと思います。

最近では、城島茂さんに三味線のお稽古をさせていただいて。本当に伝統的なですね、ああいう芸能される方がちょっと三味線を習うという感じではなくて、本格的に、1回の稽古に3時間とか4時間とかそういう長い時間をかけて勉強していただいて、3年間、城島さんに頑張っていただいて、素晴らしい演奏ができるようになって、民謡の番組で披露してきたことがあります。

また、古典芸能（邦楽）の番組では、俚奏楽という私の作品なんですけど、その中で、花柳壽楽先生という人間国宝の舞踊の先生に『俊寛』という曲を踊っていただき、これはアメリカやドイツやヨーロッパにも持っていっていただいた思い出の作品です。

あとは『女人角田』という曲も取り上げてもらいました。また『雪の山中』というものを、染五郎（現・松本幸四郎）さんに踊っていただきました。そして、日本舞踊協会の人たちが踊りました『まつりの四季』というもの。これらを古典芸能（邦楽）番組で、テレビで放送していただいたという、そういう楽しい思い出があります。

それから、ラジオの番組では、現代の短歌や俳句とか和歌とか、そういうものに三味線付けられないかなということで、俳句にも三味線付けて、そのときに「俳曲」なんて適当なことをいって名前を付けたことがあるんですけど。その俳句を、都々逸のように三味線で歌うという「俳曲」というのを作ってみたり、そんなことをさせていただきました。

あとは教育番組では、『日本の音色』とか『いろはに邦楽』、『趣味悠々～和の楽しみ　本條秀太郎の三味線ちんちり連～』。これは先ほどの南果歩さんにお手伝いいただきまして、それも大河ドラマのご縁なんですけども、講師をさせていただきました。

こういう本当に身の引き締まるというんですかね、いろんな仕事ができたってことは、本当にスタッフの皆さまはもちろんですけど、皆さんに支えられて素晴らしい仕事をさせていただいております、今現在もそうなんですけど。そのことにまず感謝したいと思います。おしまいに、このたびの受賞に感謝申し上げます。ありがとうございます。

三谷幸喜（みたにこうき）氏
（脚本家・演出家）

大河ドラマが普段どんなふうに作られているかっていうのは、僕は知りません。ただ、僕が関わった3つの作品に限っていうならば、僕の役割はですね、1年間にわたる巨大なドラマを作るプロジェクトチームの歯車の一つにしかすぎません。優れたスタッフの方と優れた俳優さんが集まって、それをプロデューサーが束ねて、あるべき方向に引っ張ってくれる。僕はそれに乗っかっていっただけです。

僕の書く脚本は設計図です。それ以上でもなければ、それ以下でもありません。だから、正直いうと、僕はこうやって、僕個人がこの賞を頂くということに、まあうれしいんですよ、とてもうれしいんですけれども、若干の違和感を覚えてしまうんですね。

ここだけの話ですけれども、プロデューサーに相談をしました、できれば辞退させていただくわけにはいかないだろうかと。うれしいんですよ、本当うれしいんですけども、そんなことを聞いてみました。説得されてすぐに翻りました。これは、僕個人がもらう賞ではなく、番組そのものがもらう賞だと思うようにしました。で、今、僕はここにいます。

というわけで、締めの言葉ですけれども、あえてこんなふうにしたいと思います。大河ドラマ『鎌倉殿の13人』に関わった全ての皆さん、おめでとうございます。

吉竹顕彰（よしたけあきら）氏
（気象予報士・気象キャスター）

本日はこのような歴史のある、重みのある賞を頂きまして、大変驚いております、そして大変光栄に思っております。ありがとうございます。

私は先ほどの映像でもありましたように、32年間、ＮＨＫの福岡放送局で気象キャスター、気象予報士として仕事を務めさせていただきました。全国にはたくさんの気象予報士、それから気象キャスターがおります。近年、大きな災害なども発生しておりますけれども、そういった情報発信という意味で、今回、代表して頂いたというふうに思っております。

実は私、この気象の仕事を始めるきっかけとして、二つのＮＨＫの番組に感謝をしております。

一つは、ＮＨＫのラジオ第2『気象通報』という番組があります。石垣島、南南東の風、風力2、天気・雨。こういった放送が毎日、今でも流されております。小学校6年のときに、私の父が小学校の教師をしてたんですけれども、1枚のわら半紙を持ってきました。それが実は天気図だったんですね。「父ちゃん、これなんね」っていうことで。それからその『気象通報』を聴いて、天気図を描きだしました。中学校、高校、ほぼ毎日おそらく描いたと思います。それだけ気象が好きになったということです。

それから、二つ目の番組が、もうかなり前なんですけれども、私が高校2年の冬だったと思います。銀河テレビ小説というのを当時やっておりました。その中で、『風の御主前（うしゅまい）』という番組がありました。これ、岩崎卓爾という人が、本土から沖縄の石垣島に測候所の所長として赴任をして、そこで台風の研究をして、とうとう一生、その石垣島で尽くして、島の皆さんのために働いたという、そういう番組だったんですね。御主前っていうのは、おじいちゃんという意味です。その番組を高校生のときに見て、私もまあこのような仕事をしたいということで、気象の道へ進む決心をいたしました。

そして、そういう仕事に携わっていくようになったわけですけれども、30歳過ぎのときに、ＮＨＫの福岡放送局で先輩から後任として業務命令みたいなかたちで、「お前、気象キャスターしてくれ」ということで、始めたわけです。いろんな気象の日々の情報の発信、それから歳時記、あるいは気候変動に伴うそういう季節の移ろいをはじめ。

で、最も私が力を入れて放送してきたのが、大雨、台風などの防災情報、緊急報道の発信ということになります。1991年、私が放送の仕事を始めて間もないんですけれども、台風19号、全国的に大きな被害を出した「りんご台風」というのがありましたが、このときの放送。それから、99年、博多駅が浸水しました、豪雨のために、このときも緊急報道。2000年代に入ると、相次いで大雨、台風の災害が続きました。そのたびに情報発信をしてまいりました。

映像でもありましたように、2017年の7月5日の九州北部豪雨。このときには線状降水帯という存在、これは、われわれの中ではある程度認識はあったんですけれども、非常に予測が難しくて。で、当時、私が危険だと非常に心配しましたものですから、慌てて局のほうに出向きました。午後3時過ぎからだったんですけれども、実際の放送、緊急報道、その第一声が、「記録的豪雨です、非常に危険な状況になってます、逃げてください」。これまで私が発したことのなかった言葉を、つい自分自身が声を出してしまったっていうのが本音です。このようにいろんな災害を経験しました。特に、17年の豪雨の直後には、非常に無

力感も感じましたし、気象予測の難しさっていうのも痛感いたしました。

今後は気候変動によりますます大雨などの災害が、全国で多発するというふうに、私自身も考えております。九州沖縄は、その最前線、防人（さきもり）的なところではあるんですけれども、雨の降り方、風の吹き方、台風の影響も非常に大きい、そういう地域でございます。これからも地域に根ざして、そして自然のそういった振る舞いを謙虚に受け止めて、情報発信に努めていきたいと考えております。

本当にきょうは、このような賞をいただきありがとうございました。

吉行和子（よしゆきかずこ）氏
（俳優）

吉行和子です。このような賞をいただくと伺った時は、本当にびっくりしました。いいのかしらなんて思ったのですが、今はありがたい気持ちでいっぱいです。

確かに、長いことやっております。最初は19歳のとき、劇団民藝の研究所の生徒だった頃に劇団の方に連れられて、内幸町にあったＮＨＫに行きました。今でいうオーディションだったと思うんですけど、全然意味がわからず、何人かの方に質問されたのに答えて、それでドラマの出演が決まりました。初めて出たのは19歳です。『青春申告』というタイトルだけは覚えてるのですが、一体、私はなにをしてたのかなって、本当にあれは私だったのかなと思う程、昔々の話です。それを証明してくださる方は、たぶんいらっしゃらないんじゃないかと思うんですけど。確かに、あの頃やったことは確かなんです。

それから、少したちまして、今でも続いている『おかあさんといっしょ』という番組の中の『おはなしこんにちは』というコーナーで、1週間に1ぺん、「おはなしこんにちはのおねえさんよ」とかいって一人でお話をやらせていただきました。15分間、お話を覚えて、カメラ目線でしゃべるんですけど。これは、なかなかなプレッシャーでしたが、お話が面白くて、楽しくやりました。この番組については覚えてらっしゃる方もいらして、テレビ局なんかでも、ディレクターやプロデューサーの方が、「僕、子どもの頃見てましたよ」なんておっしゃって、いやあ、子どもだったんだ、この人は、なんて。なんかすごく自分が長くやってるんだなってそのときですら思いました。

それから何年もやりまして、去年の暮れはＮＨＫの夜ドラというのをやらせていただきました。さっき映像に怖いおばあさんが出てきましたけど、近所のみんなから嫌われてる不気味なおばあさん役でした。こういう役は結構好きなので、張り切ってやりました。

本当に長いことやってるなと思っておりますが、これも、周りでそういうチャンスを下さってる方々のおかげなので、本当にありがたいことだと思います。その上、このような賞まで頂けて、幸せな人生だったなと今は思っております。どうもありがとうございました。